Cappella Accademica

第51回　定期演奏会

「大バッハと彼の息子たち」

2021年10月30日（土） 浜松市勤労会館（Uホール）

開場：午後1時30分 開演：午後2時
主催：カペラ・アカデミカ
助成元：公益信託チヨタ遠越順一文化振興基金
後援：浜松市、(公財)浜松市文化振興財団、静岡新聞社・静岡放送、中日新聞東海本社、K-mix

ホール内客席では携帯電話など全ての電子機器の電源をお切りください。タブレット端末など光を発する機器も、周囲の方の鑑賞の妨げとなりますので、ご使用にならないようお願いします。

御挨拶

本日は、カペラ・アカデミカの第５１回定期演奏会にご来場戴き有難うございます。

カペラ・アカデミカは、昭和４９年（１９７４年）創立以来浜松、豊橋両市を拠点に、バッハ、ヘンデル、コレッリ等のバロック音楽を主たるレパートリーとし、時折モーツァルト、ハイドン等の初期古典派の作品を加えて、演奏会を開催してまいりました。昭和４９年（１９７４年）９月２日に故濱田徳昭先生のご指導により初練習を開始してから今年で４７年となります。４７年間もの長き年月にわたり活動できましたのもひとえに皆様の暖かい御支援の賜物と心より感謝しております。今後とも音楽を通じて遠州・東三河の三遠南信文化交流のお役に立てることを切に願っております。

今回のプログラムは、音楽の父バッハとその息子たちの作品を取り上げて見ました。バッハ一族は中部ドイツ有数の音楽家系であり、この燦然たる音楽ファミリーの中で父バッハは中心的存在です。二度の結婚で20人の子供を授かり50歳の時に18番目のヨハン・クリスティアン・バッハを得たのち栄光のバッハ一族の年代記を執筆しています。

今回取り上げるのは、大バッハ（1685～1750）に加え、長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ（1710～84）、次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ（1714～88）、末の息子のヨハン・クリスティアン・バッハ（1735～82）の作品です。彼ら４人が活躍した時代を俯瞰すると次のようなことが言えます。大バッハがライプツィヒにてコレギウム・ムジクムの指揮者だった1730年台、バロック音楽は終焉を迎え、バッハ及びヘンデルの死と共に終結を宣言します。そして新しい音楽の胎動がイタリアを中心に芽生えてきます。その後ウィーンを中心とした古典派音楽が花開くのは1780年代以降、即ちハイドンやモーツァルトが本格的に活躍する時代であり、その間の数十年間は、色々な様式が混在する時期で「ロココ様式」、「ギャラント様式」、「18世紀後半、若き日のゲーテ・シラーなどを中心にドイツで興った文学革新運動（シュトゥルム・ウント・ドランク）」等々と呼ばれてきました。しかし最近ではこの半世紀を一つの統一した音楽時代として認める音楽史家が多く、その統一性の根拠を「多様性」、「複雑性」に求めるという一寸矛盾するような見方が定着しつつあります。

そして、この時代を担った中心的な音楽家がバッハの３人の息子達だといわれており、バロック音楽において重要な伴奏形態である通奏低音がその役割を終え、主観的な表現を重視した楽曲が生み出されています。この流れの先にモーツァルトやハイドンの器楽曲、交響曲があり、そしてベートーヴェンの創作を通じて輝かしい記念碑的姿へ具現化されていきます。音楽史上大バッハとその息子たちが後世に与えた影響は非常に大きく、本日はその音楽の流れを少しでも感じて、楽しんでいただければ幸いに存じます。

カペラ・アカデミカ団員一同

出　演　者

吉川 紀彦（ 指揮）

神奈川県横浜市出身。ヴァイオリンを藤田康夫、指揮法を濱田徳昭の各氏に師事。大阪労音管弦楽団でヴァイオリン奏者兼練習指揮者として活躍。1970年に大阪市民管弦楽団の設立に参画。1974年にカペラ･アカデミカの設立に参画。ヤマハ発動機㈱勤務後、㈱アルモニコス設立に参画、代表役員等を経て、現在アルカート（海外技術コンサルタント業）代表、カペラ･アカデミカ代表を務める。

釘本 眞理（ハープシコード＝チェンバロ）

静岡県浜松市出身。京都市立芸術大学音楽学部ピアノ専攻卒業。ピアノを荘良江、園田高弘、下村和子、室内楽を岩崎淑の各氏に師事。現在、ピアノ及びチェンバロによる室内楽を中心に音楽活動をする。

田代 真理（ フルート ）

静岡県磐田市出身。常葉学園短期大学音楽科卒業、同専攻科音楽専攻終了。学士芸術学の学位取得。在学中にモスクワ音楽院のセミナーに参加。フルートを川崎優、北川祥子、田中貫一各氏に師事。卒業後、渡独しミュンヘン音楽大学にてH.クレーマイヤー氏の下で研鑽を積む。日本フルート協会、静岡県フルート協会理事、浜松フルートクラブ各会員。現在、静岡県西部地域を中心に演奏活動及び後進の指導にあたる。

続　真樹（ フルート ）

静岡県浜松市出身。洗足学園音楽大学卒業。フルートを田中貫一、小林茂の各氏に師事。現在ソロやアンサンブルの演奏活動を行う一方、後進の指導に当たる。静岡県フルート協会会員、浜松フルートクラブ理事。

カペラ・アカデミカ

浜松と豊橋在住の専門家、アマチュアにより結成された室内合奏団で、今は亡きバロック音楽の大家で現天皇陛下が師事された故濱田徳昭先生により命名され、1974 年(昭和 49 年)9 月 2 日に誕生しました。濱田先生のもとで主に宗教曲の演奏法などを学び、その後合奏団独自の定期演奏会を年2回及びその他の演奏会を２～３回開催し、室内アンサンブルのインティメイトな世界を創り上げることを目標としています。

1st Violin	2nd Violin	Viola	Cello	Double bass	Harpsicord
今井　重人	磯貝　ゆり	木下　正明	佐藤　隆行	小林　　哲	釘本　眞理
◎釘本　英範	末田　　良	小林はる奈	西村美菜子	早川　浩一	
永井　正子	宮崎　秀生	船山　　敏	浜島　吉男		
林　　明子	村上　香織				
	山中　　哲				

Flute	Oboe	Bassoon	Trumpet	Horn	Timpani
石川　真理	江間由希子	高木　麻衣	岡部比呂男	池谷　浩治	今泉　好雅
続　　真樹	大橋　弥生		庭田　俊一	佐藤　博子	
			福田　徳久		

◎はコンサート・マスター

曲目解説

■ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685～1750):チェンバロ協奏曲第6番　ヘ長調　BWV1057

大バッハはその名を知らない人がいないほど有名なクラシック音楽の作曲家です。様々な曲を生み出し、音楽の基礎を築きました。豊かな人間性を備え、その能力をあらゆる部面に発揮した一人の全人的人格を有した文化人であり、そのため「音楽の父」の称号を得ています。クラシック音楽と言えばややもすればお堅いイメージを持っており、その中でもバッハは取付き難いと思う人も多いようですが、多くの楽曲を表し、感覚の表層から深奥まで届く限りなく懐の深い音楽に触れると、高い柔軟性を持つその時代の最先端を行っていた音楽家だと言えます。現代においてもバッハの音楽がジャズとして再現されるのは、バッハが時代の流れに迎合せず、ポリフォニー音楽を極めたことと無関係ではないと考えられます。彼は 1685 年にアイゼナハで生まれました。日本でいう江戸時代です。彼の家族はプロテスタントのルター派に属する音楽家一家でした。修道院に付属する学校で奨学金を受けながら学んでいます。早くに父親と母親を亡くしており、クリストフ家に引き取られて勤勉に学んでいました。ヴァイマールの宮廷楽団に入ると、彼はヴァイオリンやオルガンなどを演奏しています。彼の音楽家としての初期の活動は破天荒なものでした。教会に女性を連れ込んでオルガンを演奏したり、教会が不適切だとしている前衛的な音楽積極的に演奏したりと、教会側はそんな行動に頭を悩ませることになります。 彼は様々なジャンルの音楽を手掛け、本日演奏する管弦楽組曲第 3 番のアリア＝「Ｇ線上のアリア」や「トッカータとフーガ」などの有名曲を世に排出していきました。彼が残した楽曲は彼の名と共に現代でも受け継がれています。彼が作曲した多くの作品が音楽の礎となっており、それが「音楽の父」と称される由縁です。

さて、バッハが作曲したチェンバロ協奏曲は、1 台用から 4 台用まであり、1 台用は 8 曲、2 台用 3 曲、3 台用 2 曲、4 台用 1 曲の計 14 曲があります。本日演奏するチェンバロ協奏曲第 6 番ヘ長調 BWV1057 は, そのうちの一つでブランデンブルグ協奏曲第 4 番ト長調 BWV1049 を原曲として、当時のチェンバロの音域を考慮して移調・再編されたものです。原曲が余りにも有名すぎて影に隠れがちですが原曲の２本のリコーダーのパートは、ほぼそのまま移調して用いられ、ヴァイオリンパートはチェンバロでの演奏効果を考慮した上で改変が施されています。

第１楽章：アレグロ、第２楽章：アンダンテ、第３楽章：アレグロ・アッサイ

■長男ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハ(1710～84):シンフォニア　ニ短調　FK.65(アダージョとフーガ)

前妻マリア・バーバラから生まれた長男です。バッハが最も評価し、溺愛し、正に自慢の息子でした。大学に行けなかったことを後悔していた父により、ライプツィヒ大学に入学させて貰い法学を学び、1733 年にドレスデンの聖ソフィア教会の、1746 年にはヘンデルが生まれた町ハレの聖母教会のオルガニストに就任し、「ドレスデンのバッハ」又は「ハレのバッハ」と呼ばれています。しかし、過保護教育が災いしたのか、人間的には虚栄心が強く夢想家となってしまいました。父バッハの没後は職も失い、酒に溺れ、放蕩生活に堕ちていきました。晩年は貧困のため、父の楽譜を売り払ったり、自作だと偽ったりしたため、父バッハの作品の多くが散逸してしまいました。しかし、最近の再評価で、演奏される曲も増えてきています。

このシンファニアは、バロック風の２楽章形式の作品で、才能の片鱗を彷彿とさせる曲です。ゆっくりとしたテンポの第１楽章は、２本のフルートとオーケストラが対話するフルート協奏曲の形式。フーガで書かれた第２楽章は、緻密なバロック音楽で、奇抜な心理的飛翔や束の間の感傷の世界を展開していきます。バロック音楽の背景に新たな未来のバリエーションが垣間見える印象的な１曲です。

第 1 楽章：アダージョ、第 2 楽章：アレグロ

■次男カール・フィリップ・エマヌエル・バッハ(1714～88):シンフォニア　ニ長調　Wq183/1

マリア・バーバラから生まれた次男です。フルート好きのフリードリヒ大王にチェンバロ奏者として仕えたのち、ハンブルクの音楽監督とカントール（合唱長）を長く務めました。作曲家としてはバロック音楽と古典派音楽の橋渡し役となり、作風にはバロック音楽の装飾性を廃して明晰な形式を目指した「ギャラント様式」や、より強い感情表出を目指した「シュトゥルム・ウント・ドラング」を反映しています。また体系的で理論的な教則本『正しいクラヴィーア奏法への試論 』を著すなど、音楽理論家としても有名でした。

彼の作風や理論は、後輩のハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどに大きな影響を与えています。

本日演奏する「シンフォニア」は、彼がハンブルクで活躍していた時期の作品です。分散和音で進行する 1 楽章、2 楽章の情緒的アンサンブル、スケルッツオを想起させる 3 楽章などベートーヴェンへ繋がる音楽の世界を感じさせてくれます。

第 1 楽章：アレグロ・ディ・モルト、第 2 楽章：ラルゴ、第 3 楽章：プレスト

バッハ

■末息子(11 男)ヨハン・クリスティアン・バッハ(1735～82)シンフォニア　ニ長調　作品 18 の 4

父バッハと 2 番目の妻アンナ・マッダレーナの末息子として生まれ、兄 C.P.E バッハに養育され、ベルリン、イタリア、イギリスなどで活躍した作曲家であり、エレガントで美感に富んだ音楽を残しています。活躍した場所によって「ミラノのバッハ」､「ロンドンのバッハ」などと呼ばれました。彼の華麗で優美な音楽は当時の流行の先端を行くもので、モーツァルトにも非常に大きな影響を与えています。

作品 18 のシンフォニア集はクリスティアン・バッハのロンドン時代、1772 年から 1777 年くらいまでの間に書かれたと考えられ、彼の作品の中でも最高傑作とされています。本日演奏するニ長調のシンフォニアはこの曲集の 4 曲目にあたり、曲集で唯一トランペットとティンパニが用いられています。第 1 楽章はユニゾンの力強いリズム動機で始まり、壮麗なマンハイム風のクレッシェンドが効果的に使われています。第 2 楽章はどこかなつかしさを感じさせる優美な雰囲気が印象的。第 3 楽章は跳ね回るような活発な曲で、演奏していると目が回りそうです。

第 1 楽章:アレグロ･コン･スピリッツ、第 2 楽章:アンダンテ、第 3 楽章:プレスト

■ヨハン・セバスティアン・バッハ (1685～1750):管弦楽組曲第3番　ニ長調　BWV1068

大バッハが作った管弦楽組曲は、第１番から４番まであり、第 3 番は 1722 年頃作曲されています。最初に付点のリズムを中心としたフランス風序曲で始まり、その後に舞曲が並ぶという構成です。大学生で構成されたコレギウム・ムジクムのために作曲された大変華やかな曲で、第２曲の「エール（″アリア″のフランス語読みです）」は通称「G 線上のアリア」として大変良く知られています。その意味ではバッハの作品中もっとも有名な作品の一つと言うこともできます。この曲は弦楽合奏にトランペット 3 本，オーボエ 2 本，ティンパニが加わりますので，祝祭的な気分の漂う作品となっています。

１．序曲、２．エール（アリア）、３．ガヴォット、４．ブーレ、５．ジーグ